

先週の講壇から

“ 価値ある人 ”

イザヤ書 第43章 第1節～7節

聖句「わたしの目にあなたは価高く、貴く／わたしはあなたを愛し／あなたの身代わりとして人を与え／国々をあなたの魂の代わりとする。」(43:4)

1. 《人を見る目》 教会には様々な人たちが訪ねて来ます。中には、お金の無心に来る人たちもいます。基本的にお金は差上げませんが、先方も手を代え品を代えて、当方からお金を引き出そうとします。そんな遣り取りを長年続けたせいで、すっかり心がスレてしまいました。ある出来事があって、自分は「人を見る目がない」と意気消沈してしまいました。すると、九州時代の親友から「あなたは人を見る目がなくて良い。神さまが見て居られるのだから」と言われたのです。
2. 《人間の価値》 企業の人事部には、社員を「適材適所」に当て嵌めて「人を見る目がある」と賞賛される人もいます。子どもの音楽の才能を見抜いて、世界的な音楽家に成長させた人もいます。しかし、人材発掘の達人は、その「人を見ている」のではなく、何か別の特色に目を留めたのではないのでしょうか。極論をすれば、私たちに「人を見る目」等はないのです。神さまだけが、その人の真実を見て居られるのです。その人の価値も同じです。私たちは、自分が「価値ある人」でありたいと願いますが、稼ぎの多さや有能さ、若さや美、健康や学識、役割や貢献度などを誇ったりしますが、そうしたものは遅かれ早かれ、失われていくのです。私たちが価値と思っているものは、必ず消え去ってしまうのです。
3. 《イエスの愛》 私たちは誰でも、自分が「価値ある存在」であると、誰かに認めて貰いたいのです。誰も認めてくれなくても、自分で認めようとしています。けれども、人間は「土の塵に等しい」というのが聖書の基本的な考えです。人間そのものには何の価値も無いのです。私たちが「存在価値」と考えているものは木っ端微塵になります。自らの無価値を悟った時にこそ、十字架のイエスさまの語り掛ける御声が聞こえるのです。「第二イザヤ」は「贖い」がテーマです。神が私たちを「身請け」して下さるのです。激しい愛によって、独り子を奉げられたのです。価値があるから愛するのではなく、愛されて価値ある者とされるのです。

朝日研一朗牧師